

「時には、海月のように揺蕩ってもいいんじゃないか？」

Parade556

## 登場人物

佐原凜 (30) (28)  
家永王将 (7)  
大南天真 (31)  
家永総一郎 (71) (69)  
鳥海幸之助 (52)  
久良岐瞬 (37)  
及川洋平 (51)  
瓦井茜 (30)  
飯倉治夫 (27)  
日下部良明 (29)  
その他  
尾道製菓の社員  
警察官  
海月カフェの女性店員

尾道製菓・営業部課長  
家永の孫  
立てこもり犯  
プライムグループ・会長  
尾道製菓・代表取締役社長  
警察官・ネゴシエーター  
警察庁総監(声のみ)  
尾道製菓・営業部係長  
尾道製菓・営業部の社員  
王将の執事

○「尾道製菓」本社ビル・1階エントランス  
栄養食品（カロリーメイトのような）  
やスポーツドリンクを紹介する看板が  
置かれ、大型モニターにはCM（スポ  
ーツ選手がプレーして尾道製菓の飲料  
を呑む）が流れている。  
スポーツ関係の隣には、ヘルスケア関  
連の菓の看板や広告が並んでいる。  
尾道製菓の二大事業である。

○同・社長室の中

鳥海幸之助（52）と家永総一郎（71）  
が握手をしている。

目の前にたくさんのマスコミがいて、  
二人に向かってカメラのフラッシュ。  
テレビカメラも回っている。

マスコミA「鳥海社長、プライムグループと  
契約できた今のお気持ちちは？」

鳥海「ついに、この日がきました」

○コンビニ（プライムマート）の店内

棚に、店員が尾道製菓の商品を並べていく（栄養食品や菓など）

鳥海の声「全国に2万4000千店あるコンビニ」

○ショッピングモール（プライム）全景

○同・商品棚

店員たちが、どんどん尾道製菓の商品を並べていく。

鳥海の声「ショッピングモール。そのすべてにウチの商品を置いていただけるなんて」

○尾道製菓・社長室

鳥海「悲願達成です」

鳥海、満面の笑顔。

鳥海と家永、握手を解く。

マスコミB「家永会長。尾道製菓とは過去に遺恨がありました。今回の契約は歴史的な

和解ということですね？」

家永「それもすべて、彼女のおかげだよ」

家永の指さした先にいるのは、佐原凜

(30) 【営業一課 課長】の名札を下げている。

家永「彼女の情熱に負けた」

凜の前に立つ家永王将(ノ)

凜は、王将の肩に手をかけている。王将の小さな手が凜の手の上に重ねられている。一見するとほほえましい光景だが、王将の立てた爪が凜の手に食い込んでいる。

凜は痛がる素振りを見せず、笑顔。

家永「私の孫も、彼女に夢中でね」

マスコミのフラッシュが一斉に、凜にたかれる。

○記事の見出し

【プライムと尾道製菓、歴史的和解】

【立役者は、30歳女性営業課長】

写真は、凜や家永と鳥海の握手の場面。

○尾道製薬・会議室の中

T・「2日後 企画会議」

円卓に座る出席者たち。下座に凜。上座に鳥海。その他の参加者は全員男。

凜、手をあげて立ち上がると、

凜「この企画、それでは足りないと思います」

鳥海「ならば対案を出さない」

凜「はい。資料を用意しました」

凜、手持ちの資料を配りはじめる。

× × ×

鳥海、大きくうなずくと笑顔になり、

鳥海「うん。いいだろう。それじゃあ、佐原

くんがくれた情報を盛り込んで、もう1回、

企画を練り直してくれるか」

鳥海が話しかけた中年男性、

男性「しよ、承知いたしました」

男性、隠れて凜を見る。凜、平然。

ぐぬぬ、となる男性。

○同・会議室前の廊下

凜、スマホで電話しながら速足で歩いて行く。

凜を羨望のまなざしで見つめる女性社員たち。

男性Aの声「くそっ。またあの女にしてやられたよ」

男性Bの声「仕事ができるからって、調子に乗りやがって」

○同・エレベーターホール

凜、エレベーターを待つことなく、階段を急ぎ足で下りていく。

○同・営業部の中（夜）

凜、一人残り働いている。時計は日付が変わろうとしている。

○同・一階のエントランス

人の姿ない。

ガラス張りの窓の向こう、週末のよう  
で、家族連れでいっぱい。みんな楽し  
そう。

○尾道製薬・営業部の中

凜、一人働いている。

○同（日変わり）

凜や、その他の社員達が働いている。

社員達の顔に緊張感が漂っている。

凜の脇に立つ飯倉治夫(27) 脂汗。

凜、資料をめくりながら、

凜「飯倉くん。だから、説明してくれないと

わからないって」

飯倉「は：はい」

凜「はいじゃなくなつて。ここの数字の根拠」

飯倉「えーと：その」

凜「君がこの資料つくったんだよね？」

飯倉「：すみません」

凜「何で謝るの？」

飯倉「はい。えーと、すみません」

凜のスマホのタイマーが鳴る。

凜、何も言わず立ちあがると、

凜「係長。午後、お願い」

斜め向かいに座る【営業一課 係長】

の名札を下げた瓦井茜（30）

茜「承知しました」

凜、会社の携帯と自分の携帯をテーブルの上に置く。

凜「午後は、電話つながらないから」

茜「これも仕事、ですもんね」

凜「あの子、スマホもつてると嫌がるから」

茜「毎週、月曜の恒例行事化してきてますね」

凜「月曜以外、習いごとで忙しいんだから仕方ないよ」

茜、苦笑。

飯倉、立ち尽くしたまま。

凜「飯倉くん。またスケジュールとるから、

続き説明して」

飯倉「しよ、承知しました」

凜、足早に壁掛けのスケジュールボードの前まで行き、【プライムグループ】と書き込みはじめる。その背中を、固唾を呑んで見守る他の社員たち。

凜、書き終わると出ていく。社員たちが息を吐こうとした瞬間、課長席の電話が鳴る。

凜、戻ってくる。息を詰める社員達。

凜、電話をとる。男性の声が電話口から聞こえてくる。

凜「お疲れ様です：ですから、何度もお話ししている通り、私は大丈夫です。お気になさらないでください」

電話の相手が、何か早口に言う。

凜「（遮って）産業医の面談なんて、心の弱い人間のやることです。時間がありませんので、これで失礼します」

凜、電話を切ると、足早に出ていく。

凜が出ていった姿を見て、緊張の糸が切れたようにはーっと息を吐く他の社

員たち。

茜、その光景を見て立ち上がり、凜を  
追いかけていく。

○同・エレベーターホール

茜、凜のそばにピタリと付いて、

茜「誰もいないから、タメ語で話すよ」

凜「どうぞ」

茜「（溜息をついて）同期として、これで最  
後の忠告。あんまり他の部下がいる前で、

飯倉を叱るんじゃないよ」

凜「時間がないの。それに、あれしきのプレ  
ッシャーに負けてるようじゃ成長しない」

茜「あのさ、あれでも男なんだから、プライ  
ド尊重してやんなよ」

凜「まだそんなこと言ってるの？男、男って、  
だから馬鹿にされるのよ。私達は」

茜「逆に、たまにはアンタも女を使いなよ。  
いい？このままだったら、アンタ、会社中  
の男が敵になるよ」

凛 「ご自由にどうぞ」

茜 「その態度」

凛 「忘れたの？」

○同・営業部の中

飯倉をなぐさめる他の社員たち。

凛の声 「その、バカでくだらない男のプライドのせいで、ウチは一度、潰れそうになったのよ」

茜の声 「わかってるって」

○同・1階のエントランス

談笑する中年の男子社員たち。

凛の声 「鳥海社長になって、実力主義に変わった。だからウチは持ち直した」

茜の声 「だからって、これまでの連中がみんな消えてなくなったわけじゃないっしょ」

○同・エレベーターホール

凛、茜の方を向き直り、

凜 「消すべきなのよ。男ってだけで働かなくても無駄に高い給料をもらってた時代は終わり」

茜 「ウチらと違って、養わなきゃいけない家族もいるのよ」

凜 「そんなの理由にならない。働かないのは、全員、切るべきよ。経費の無駄」

エレベーターが来る。

ドアが開く。エレベーター内にいる人、凜に気づき、身を固くする。

凜、茜の方を見ずに乗り込んでいく。

エレベーターのドアが閉まる。

○同・営業部の中

茜、戻る。

社員A 「あ、係長。総務部長からお電話ありました」

茜 「折り返し？」

社員A 「ですね」

社員B 「大変ですね」

茜「私に言ったって無駄なんだけどね」

飯倉「課長。戻ってきますでしょうか？」

茜「戻るでしょう。絶対」

全員、茜の方を見る。

茜「私の予想はね、19時だな」

茜、不安そうな顔をする飯倉を見て、

茜「飯倉くんは、得意先から急なアポが入ったから、このまま営業いって直帰ってのはどう？」

飯倉「あ、ありがとうございます」

他の社員たちから拍手が沸く。

茜「よし。19時までに帰るよ。みんな、

気合入れてやんな」

みんな、目の色変えて働きます。

茜、自席に戻り、溜息をついてから番号表を見ないで内線電話をかける。

茜「瓦井です。先ほどは、ウチの佐原がたいへん失礼いたしました」

男性の声「もう勘弁してよ茜ちゃん」

茜「すみません」

男性の声「月の残業が120時間超えてて、それが3年もつづいてるんだよ」

茜「うわあ。ザ、仕事人間」

男性の声「毎月、産業医に怒鳴られるのぼく  
なんだよ」

茜「ですよねえ」

男性の声「いっそ、倒れてくれないかな」

茜「鉄人ですんで」

男性の声「衣笠かつ」

茜「キヌガサって？」

男性の声「いや、いや。とにかく、頼みま  
すよ係長」

茜「総務部長って大変ですね」

男性の声「誰のせいなのよッ」

茜、ぺろっと舌を出しておどけた顔に  
なる。

○繁華街・大通り

凛、立っている。

凛の声「これから、私はこの世界で最も嫌い

な男と会う」

路肩に黒塗りの車が停まる。

凜の声「偉そうで、自分勝手に、女を見下して……」

後部座席から出てくる日下部良明(29)

見るからに屈強な男。日下部、凜を見つけると丁寧に頭を下げる。

凜「お疲れ様です」

日下部「いつも大変お世話になっております。今日は、お忙しいところ……」

後部座席から王将が飛び出してくる。

王将「邪魔だ。バカ」

日下部「失礼いたしました」

凜、笑顔で王将を迎え入れる。

○(回想) 尾道製菓・社長室

記者会見が終わり、マスコミはいない。

家永、王将の肩を抱いて、

家永「この子が、将来、うちのグループを率いていくんだ。な、王将」

王将「うん。任せておじいちゃま。俺は、男の中の男だから。絶対、大丈夫」

家永、心の底から嬉しそうに笑う。

○元の通り

凜の笑顔。

凜の声「何が男の中の男だ。とにかく、仕事だったら、どんな最低で最悪な男が相手でも我慢してやる」

王将「凜。生きてやがったのか」

凜「こんにちは」

日下部「本日は、おぼっちゃまのこと、よろしくお願いいたします」

凜「承知いたしました」

王将「（日下部に向かって）バカが。俺が、コイツと遊んでやってんだぞ」

日下部「たいへん失礼いたしました」

凜「そうだよね。王将くん」

王将「黙れ凜。俺に指図するな。見せろ」

王将、凜の鞆を漁り出す。鞆の中には、

尾道製菓の栄養食品や菓が入っている。

ハラハラする日下部。

凜「持ってきてないよ。スマホ」

王将「うるせえ黙ってろ」

王将、鞆を漁るのを止めて、急に凜の足を蹴る。

凜「いたっ」

瞬「クソ凜。死ね」

凜「蹴らないで」

瞬「悪は叩いていいんだ」

凜「良いわけないでしょ。ほら、手つなごう」

瞬「ヤダ。ダサイ。俺は男の中の男だぞ」

凜「知ってるよ」

瞬「だせえ。男の中の男が、女なんかと手つ

なげるか…お願いしろ。手、つなごせてく

ださいって」

凜の声「このガキ、殺したい」

王将、小憎らしい顔で凜を見上げる。

凜「手、つなごせてください。お願いします」

王将「女はダメせえ。女はダメだな。よわっち

くて、生きてる価値ねえな」

凜、王将に向かって手を出す。

王将「俺みたいな強い男は、女を守ってやんなくちゃいけないんだ。そう、お爺ちやまが言ってたんだ。ああ、めんどくせえ」

王将、凜の手を取る。二人、歩き出す。

日下部、何も言わず凜に頭を下げる。

王将、反対の手でネックレスを見せながら、

王将「いいだろ。お爺ちやまにもらったんだ」

凜「いいなあ」

王将「良いとこ、連れてってやる」

凜「どどここ？」

日下部、離れていく二人からスマホに視線を移す。

王将のネックレスにはGPSの機能がついており、移動しているのが見える。日下部、車に乗り込もうとして、ふと、通りの方に視線をやる。

大南天真（31）肩掛けのゴルフバッグ

のようなものを背負って立っている。  
大南、バッグの紐を持つ手が震えている。  
視線の先に、大手銀行。

日下部「まさかな。映画の見過ぎか」

日下部、車に乗り込んでいく。

○海月カフェ・店内

店内のあちこちに、アクアリウム。その中に様々な海月がいる。

○同・ボックス席

凧と王将、ボックス席に通され、隣同士に座っている。

凧、メニューを開きながら、反対の手で、今にも飛び出していきそうな王将の腕をつかんでいる。

若い女性定員、困り顔。

凧「まず、注文しないと。何呑む？」

王将「いらねえよバカがッ」

凧「王将くん」

王将「海月、やっつけたい」

凜「やっつけないよ。見るの。海月は」

王将「だせえ。海月。だせえ」

王将、凜の手をひっかき、飛び出して  
いく。

凜「痛っ（店員に向かって）ごめんなさい。

コーヒーと：クリームソーダください」

店員「はい」

凜、飛び出していく。

凜「王将くん」

○同・アクアリウムの前

王将、アクアリウムのガラスをバンバ  
ン叩きだす。

王将「何で生きてんだよ。お前ら」

凜「王将くん、ダメだって」

王将「きもちわるっ。気持ち悪いのに何で生  
きてんだよ」

凜「王将くん。ガラス叩かないで」

店員たちも、遠巻きに見ている。

凜「王将くん」

大南の声「やめろ」

凜と王将、振り返る。

大南が立っている。

大南「なんで。そんなことするんだ」

王将「誰だ。オマエ」

大南「海月が可哀そうだろ」

王将「可哀そうなもんか。バカ。こいつらは、脳がないんだ。だからなーんにも、わかってないんだ。そんなことも知らないのか？おまえ」

王将、またアクアリウムの方を向いて  
ガラスをたたきはじめる。

大南「やめろ」

王将「できそこない。みんな死んじまえ」

凜「王将くん。やめて。お願いだから」

大南「やめろって言うのがわからないのか」

王将、狂ったようにガラスを叩く。

王将「みんな死ね。死んじまえ」

凜「王将くんッ」

大南、ゴルフバッグのようなものの中  
から猟銃を取り出し、王将に向ける。

大南「やめろ。やめないと撃つぞ」

凜、振り返り、驚く。

王将、振り返るも、驚きもせず、

王将「そんなの玩具だろ」

大南「ほんものだ」

王将「だったら撃ってみろよ」

大南「なんだと」

王将「玩具のくせに」

大南「ほんとに撃つぞ」

王将「俺サマにウソは通じないぞ」

大南「嘘じゃない。ホンモノだ」

王将「じゃあ撃ってみろ。撃ってみろよ臆病  
者」

大南「ば、ばかにしやがって」

大南、トリガーにかけた指が震える。

王将「いいか貴様。俺は男のなかの…」

轟音が店内に鳴り響く。

悲鳴を上げて逃げていく店員たち。

凜、驚いて腰を抜かす。

王将、目を大きく見開く。

○カフェの入ったビルの通り

銃弾の音に、驚く通行人。

息を切らして走ってきた日下部が、ビルを見上げる。ビルから飛び出してくる海月カフェの店員たち。

日下部「どうした？何があった」

店員「い、いきなり銃。銃を」

日下部「中に誰がいる？子供がいなかったか」

店員「子供、子供：いました。女の人と」

日下部「マジか。しまった」

日下部、スマホで電話をかける。

○尾道製菓・社長室

鳥海、内線電話をとる。

女性の声「家永会長からです」

鳥海「わかった：会長」

家永「（遮って）今すぐテレビを付けるッ」

鳥海「ど、どうされたんですか？」

家永「いいから。すぐだ。うちの孫が、孫が」  
鳥海、すぐにテレビをつける。

○ニュース映像

キャスターが原稿を読み上げる。

キャスター「ただいま入ったニュースです。

秋葉原のカフェに、猟銃をもった男が入り、  
現在、客を人質に立てこもっているとのこ  
とです」

店のそばに集まる警察車両と野次馬。

○尾道製薬・営業部の中

課長席の電話が鳴る。

茜、立ちあがり電話のところへ。内線  
番号を見て、

茜「あ。社長。マジか（電話に出て）お、お  
疲れ……」

鳥海の声「（遮って）佐原はどこだ？」

茜「え？か、課長ですか」

鳥海の声「どこにいるんだ？」

茜「会長のお孫さんというはずです」

電話、ガチャンと切られる。

茜、顔に？が浮かぶ。

○海月カフェ・店内

アカリウムの中で、ゆっくりと浮遊する海月。

凜、しやがみこんで震えている。王将は、凜の左足にかろうじて組み付いているが、人形のように動かない。

凜「どうしよう：どうしよう」

店の固定電話が鳴りつづけている。電話が鳴りやむ。すると間髪入れずに、また電話が鳴りだす。

○カフェの入っているビル・1階の管理室

警察官たちが出入りしている。

特設ブース内に、音響機材が準備されている。スーツ姿の久良岐瞬（37）が、

機材の前に座っている。隣に警察官。

久良岐「まず、店の電話を切ってください」

警察官「し、しかし久良岐警視正。犯人との

通信手段が」

久良岐「カフェの電話はネットで調べれば簡

単にできてきます。そのせいで、今、ひつき

りなしに電話がかかってきてるでしょう。

犯人が興奮していたらまずい」

警察官「わかりました。通信手段は」

久良岐「こちらが用意した携帯を支給します」

久良岐、左手でスマホを持ち上げる。

警察官「それでは、ビルの電話を遮断します」

久良岐「すぐに実行してください」

警察官、出ていく。

久良岐、目の前のモニターに映る店内

の防犯カメラを見る。凜と王将。そし

て部屋の反対側に猟銃を抱えた大南の

姿が見える。

久良岐の手元にあるタブレットに、凜

(所属先の企業)と王将(プライムグ

ループ会長の孫）の情報がある。

久良岐、イヤモニをはめて、スーツの胸ポケットにマイクをつける。

久良岐「ああ。テス、テス」

管理室の中に久良岐の声がする。イヤ

モニから及川洋平（三）の声。

及川の声「久良岐ッ」

久良岐「及川長官。お疲れ様です」

及川の声と応答する久良岐の声は管理

室の中に聞こえていない。

及川の声「何としても、人質の子供だけは助けだせ」

久良岐「人質には女性もいます」

及川の声「女なんてどうでもいい。プライム

グループの会長のお孫さんなんだッ」

久良岐「承知いたしました」

及川の声「もしものことがあれば、おまえも、そして私のクビも飛ぶ」

久良岐「全力を尽くします」

及川の声「頼むぞ久良岐」

久良岐、モニターを見る。

久良岐「俺はネゴシエーターだ。絶対に二人とも助け出してやる」

久良岐、モニターの大南を指さして、

久良岐「もちろん、こいつもな」

○カフェの中

電話が鳴りやんでいる。

アクアリウムの海月、ゆったりと浮遊している。

凜、顔をあげられない。冷水をぶっかけられたように全身が震えている。

傍らの王将は、死んだように動かない。部屋の反対側に座る大南、猟銃を両足の間に挟んで銃身を両手でつかみ、凜と同じようにガタガタと震えている。

大南「何でこんなことに。何で。何で」

凜、余裕がなくて気づけない。

○（回想）尾道製菓・社長室

家永の前に立っている王将。

家永、王将の肩に手を置いて、

家永「佐原さん。これからも、王将のこと、

よろしく頼むよ」

凜「承知いたしました」

傍にいる鳥海の笑顔。

○元のカフェ

凜、ハツとなり、震える手で王将を抱

き抱える。上体だけ抱くような不格好

な形。王将、地面に顔を伏せたまま動

かない。

凜「お、お、王将くん！」

久良岐の声「ごめん。電話うるさかったよね」

凜、驚く。大南も驚き、

大南「ひゃっ…だ、だれ？誰なの」

○管理室

大南や久良岐の声が聞こえている。

大南の声「誰なの」

久良岐の声「ぼくは、久良岐と言うんだ」

○カフェの前の廊下

久良岐、入口の開け放たれたドアの脇に背中をつけて座っている。

久良岐は、イヤーマニターとスーツの胸にマイクをつけている。反対の手にはスマホ（久良岐のスマホとは異なる）

○カフェの中

大南「くらき？」

久良岐「そう。君たちを助けにきた」

大南「ぼ、ぼくは何も悪くないんだ。ぼ、ぼ

くは」

久良岐「わかってる。わかってるよ」

凜も何か言おうとするが、言葉が出て

こない。

大南「ほんとは、銀行に行こうと思ってて、

銀行。銀行に」

久良岐「そうか。銀行に」

大南「でも：最後に海月、海月がみたくて」  
アクアリウムで浮遊する海月。

大南、何とか笑おうとするも顔は引き  
つるばかり。

大南「海月、海月が好きなんだ。海月はやさ  
しいから。だから、最後に、銀行の前に見  
ようと思つて」

久良岐「海月はやさしいよな。わかるよ」

大南「そうでしょ。そうなんだ。だから：海  
月は、海月だって悪くないんだ。あ、そう。  
そうだよ。（王将を指さして）あの子が、  
あの子が海月を叩くから」

凜の表情に見る見る怒りが沸き、

凜「：こ、この子は悪くないでしょッ」

凜、反射的に言ったあとで、「あ」と  
なり口をつぐむ。

大南も、「あ」となり、黙る。

久良岐「悪い人なんて誰もいないよ」

どこか呑気に聞こえる久良岐の声に、  
凜の顔色に怒りが沸く。

凜「あの人は、悪い人でしょ」

凜、震える手で大南を指さす。

大南、ショックを受けた顔。

凜「店の中で、銃を撃って。どう考えても悪い人じゃない」

○カフェの前の廊下

久良岐の顔が曇る。その手にはスマホ。

久良岐の声「くそっ。バカな女め」

イヤモニから及川の声。

及川の声「久良岐。王将くんは？王将くんの状態を確認しろ」

○カフェの中

久良岐「みんなを、無事にここから出したいんだ」

凜「あなた警察でしょ。今すぐ私達を助けて」

大南「け、警察なの？」

久良岐「いや違うよ。警察じゃない」

凜「じゃあ、どうしてここにいるの。警察じ

やなかったら何でここにいるの」

○カフェの前の廊下

久良岐、苦虫をかみつぶした顔。

及川の声「久良岐。何してるんだきさまは。

久良岐。久良岐」

久良岐、入口脇に置かれたアクアリウ

ムの中で浮遊する海月が目に入る。

久良岐の声「くそっ。呑気なもんだぜ」

○カフェの中

大南、がっかりしてうつむく。

大南「やっぱり警察なんだ。警察」

久良岐「いや、違うんだよ。違う」

大南「警察…警察がなんで」

凜「いいから、早く私達を助けて」

大南「ぼ、ぼくは逮捕されるの？逮捕？」

久良岐「ちよ、ちよっと待って。ちよっと一

旦、落ち着こうよ」

大南の「逮捕」と凜の「早く助けて」

が重なり、ひっちゃかめっちゃかな状況になる。

久良岐「ごめん。まず、ぼくから謝らせてほしい」

凜「そんなことどうでもいいから早く助けて」

凜、王将（上体）を抱き寄せる。

久良岐「ぼくが警察に所属してるのは間違いない」

凜「早くして。早く。早く」

大南「やっぱり警察だったんだ：酷いよ」

久良岐「本当に申し訳なかった。ただ、最初に言ったのは何も間違っていない」

凜「どうして助けてくれないの。何してるの。ほんとに」

大南「最初に言ったのって何？」

久良岐「ぼくは、ここにいる全員を助ける」

凜「私達だけでしょ」

大南「どうして？どうして？ぼくは？ぼくはどうなっちゃうの」

大南、凜の方を見る。

凜、猟銃が怖くて目をそらす。

凜「：あ、あなたは」

久良岐「（遮って）ちよ、ちよっと待ってくれ」

大南「ぼくは助けてくれないの？」

久良岐「助けるさ。もちろん」

凜「何言ってるの。頭おかしいんじゃないのッ」

久良岐「王将くん。王将くんは大丈夫？」

凜「え？あ…」

凜、王将を見る。

凜「王将くん？王将くん」

王将、顔を伏せたまま動かない。

久良岐「どこか怪我してない？」

凜「どこも怪我なんかしてないから。王将くん。王将くん。大丈夫？大丈夫？」

凜、自分の鞆から尾道製菓の商品を取り出しながら、

○尾道製菓・エントランス

栄養食品やヘルスケアの菓の看板や広

告。

凜の声「どうしよう。これも違う。こっちも  
違う。どうしよう。どうしよう」

○カフェの中

凜の周りに商品がとっ散らかっていく。

王将、うつ伏せのまま動かない。

大南、あわあわとなって振り返り、

大南「も、もしかして…死んだ？その子」

凜「死んでるわけではないでしょ」

大南「…よかった」

凜「良くないから。全然。全然よくない」

大南「ごめん…なんか、ごめん」

凜「この子だけでも帰して」

大南「あ…うん。そうだね」

凜、顔をあげて大南を見ると、

凜「いいの？ほんとにいいの？」

大南「ああ。うん」

○カフェの前の廊下

久良岐の声「おいおい。ちよつと待て。何、

勝手に進めてんだよ」

久良岐、アクアリウム越しに映る大南が、猟銃を抱えているのが見える。

久良岐の声「ホシは猟銃もってんだぞ」

久良岐、何か言おうとした時、イヤモニから及川の声、

及川の声「久良岐。すぐ本部に戻れ。すぐにだ。久良岐。久良岐ッ」

○カフェの中

凜「王将くん。出ていって」

凜、王将を立ちあがらせようとするも、床に下半身をつけたまま離れない。

凜「王将くん。先に出て良いつて。ほら、王将くん」

王将、嫌がる。

凜「王将くん。王将くん」

王将、凜から絶対に離れないぞという

構え。

凜「王将くん。出れるんだよ。王将くん」

大南、何か言いたげにするが言えない。

凜「王将くん。王将くん。お願いだから、王将くん」

大南、うつ伏せになっていた王将の股間あたりを見る。濡れている。

王将は、凜に上半身だけ組み付いている。頑なに上半身だけ。

凜、涙目になって王将を何とか連れ出そうとする。

大南「…あの、あの」

凜「王将くん…王将くん」

大南「あの」

凜「王将くん…王将くんどうして？」

大南「たぶん、その子…」

凜「王将くん。早く、早く出ないと…」

大南「あの」

久良岐「ごめん。一度、戻らなくちゃいけないかった」

凜「ちよ、ちよっと待って」

大南「早くぼくのこと助けてよ」

久良岐「わかってる。わかってるよ」

久良岐、スマホを店の中に入れる。

久良岐「連絡がとりたくなったら、ソレでいつでも連絡して」

凜「ちよっと待ってって」

大南「どこへ行くの？」

久良岐「すぐ、戻ってくる。必ず」

大南「早く助けてよ」

凜「何言ってるの？意味わかんない」

久良岐「ちよっと待ってて。ね」

久良岐、立ちあがり離れていく足音。

大南「早く、早く戻ってきて」

久良岐「すぐ戻ってくるから」

凜「ちよっと。警察でしょ。助けてよ。早く。

この子だけでも先に連れて行ってよ」

凜、王将を抱えて立ちあがろうとする

も、足が震えて力が入らない。

○1階（管理室）に通じる階段

久良岐、階段をおりていく。

久良岐の声「くそつ。最悪だ。最悪」

イヤモニからは、及川のなる声。

○カフェの中

大南、不安そうにちらちらと入口の方を見る。

凜、ふとアクアリウムの海月に視線が行く。ふわりふわりと浮遊する海月。

見ているうちに、凜の顔にいら立ちが沸く。

大南「海月なんか、見に来なければよかった」

凜「私も」

凜、言ったあとでハツとなる。

同じ表情をしている大南。

目を合わせない二人。

大南「…ごめん」

凜、何も言わず王将を抱き寄せる。

○管理室の中

久良岐が戻ると、家永が警察官たちの  
中で喚いている。日下部が部屋の隅で、  
しょんぼりとしている。

家永「うちの孫に怪我でもさせてみる。全員、  
クビにしてやるからな」

久良岐「関係者以外は出ていってくれ」

家永「貴様。私を誰だと思ってる」

久良岐のそばに警官が来て耳打ち。

警官「長官が、了解しています」

久良岐「な、なんだって」

家城、スマホで電話しはじめる。

家永「及川。貴様、部下をどういいう教育して  
るんだ。無礼な態度をとられたぞ」

久良岐、イヤモニ越しに聞こえる及川  
の声。

及川の声「たいへん申し訳ございません」

家永「警察庁長官から政治家の転身は、諦め  
ることだな」

及川の声「そ、そんな…会長」

家永「だったら、今すぐ孫を助けだせ。今すぐだ」

及川の声「承知いたしました」

家永、電話を切る。

及川の声「おい。久良岐。報告しろ。報告だ」

久良岐、家永と睨み合いながら、

久良岐「通信用のスマホは、店の中に置いてきました」

家永「私が電話する」

久良岐「長官。会長が、直接電話するとおっしゃっています」

及川の声「…」

家永「お前になど任せてはおけん。私の孫なんだ。大事な。たった一人の」

久良岐「長官」

及川の声「…お願いしろ」

久良岐「いいんですね」

家永「早く連絡先を言え」

久良岐「いいんですね？長官」

家永「早く言え。バカ者が」

○カフェの中

大南の前に置かれたスマホが鳴りだす。

大南「えっ」

電話が鳴り続ける。

大南「ど、どうしよう」

大南、凜の方を見る。

凜、目を合わせようとしなない。

大南、恐る恐る電話に出る。

大南「も、もしもし」

家永の声「犯人か？」

大南「えっ、えっ……」

家永の声「今すぐ孫を返せっ」

大南「え……」

家永の声「貴様のしたことは重罪だ。死刑に値する」

家永の声が、凜のところまではっきり

と聞こえてくる。

凜、青ざめる。視線の先に猟銃。

大南「う……うそだ。ぼ、ぼくが死刑」

凜「ちよ、ちよっと待って。死刑にはならな

いから」

大南、ショックでスマホを地面に落とすと、目に涙をいっぱい溜めて、

大南「ぼ、ぼくは犯人なの？犯人？」

以降、スマホから家永のなる声。

○カフェの前の通り

たくさんのマスコミや野次馬。

何台ものテレビカメラ。

凜の声「そ、そんなことないから」

○カフェの中

大南「で、でも…犯人なんでしょ」

凜「…」

大南「犯人なんだ。ぼくは悪くないのに。どうして？ぼくは悪くないのに。銀行だって、行けって言うから」

凜「行けって？誰に？共犯者がいるの」

大南「（うなずいてから）奥さん。前の。別れた。ぼ、ぼくはまたよりを戻したくて、

お願いしたら、意気地なしだから嫌だって」

凜「…」

大南「銀行強盗できるくらいの勇気があったら、また結婚してくれるって言うから。だから、だからぼくは…」

凜「う、うそでしょ」

大南「ぼくは悪くないでしょ？ぼくのせいじゃないでしょ？」

電話の向こうから、家城のなる声。

大南「うるさい。うるさい、うるさい」

大南、猟銃をスマホに向かってぶっばなす。

銃声が街中に響き渡る。

○カフェの前の通り

○管理室の中

家永、スマホをもったまま絶句。

久良岐、モニターを見る。

久良岐「長官。現場に向かいます」

及川からの返答はない。

○2階（カフェ）に通じる階段

久良岐が登っていくと、大南が騒いでいる。

○カフェの前の廊下

久良岐「ごめん。遅くなった」

○カフェの中

大南「嘘つき。ぼくを助けてくれるって言ったのに」

久良岐「嘘じゃない」

凛「早く助けて。殺される」

久良岐「みんな、落ち着いてくれ」

凛の泣き出す声。王将の泣き出す声。

久良岐「みんな落ち着いてくれ。全員、必ず助けだすから」

○尾道製菓・営業部の中

茜や飯倉たちがテレビで生中継を見て  
いる。

飯倉「課長って、人質になっても冷静なんで  
しょうね」

他の社員たちが同意する中、茜は画面  
から目を離さず、

茜の声「凜。とにかく無事に帰ってきて」

凜の声「なんで早く助けてくれないのよお」

○カフェの中

凜、子供のように泣きはじめる。アク

アリウムに映る凜の泣き顔。

王将も凜にしがみついて泣いている。

大南も泣き出す。

大南「死にたい。死にたいよお」

スマホから家永の声。

家永の声「死ね。今すぐ死んでしまえ。出来  
損ないめ」

大南、自分の首元に銃口をつきつける。

久良岐「待て。待つんだ」

及川の声「どうした？久良岐。王将くんは無事か？王将くんは」

久良岐「自分の命を大切にしろ」

久良岐、部屋の中に飛び込んでくる。

大南を抱きとめようとして、スマホを

蹴飛ばしてしまう。

スマホが床をすべって凜の目の前に。

家永の声「オマエみたいな女の腐ったような

出来損ないは、今すぐ死んでしまえ」

久良岐、大南を抱き寄せる。

大南、わんわんと泣く。

久良岐「よせ。よせってバカなことは」

久良岐、ゆっくりと銃口を大南からど

ける。久良岐、反対の手でイヤモニを

外す。及川の怒鳴り声が遠ざかる。

久良岐、大南を子供のように背中を優し

くなでる。

凜、足元のスマホを見る。

家永の声「死ね。今すぐ死ね」

凜「か：会長。会長」

家永の声「…佐原か？」

凜「はい」

家永の声「オマエのせいだ。オマエのせいであちの孫が」

凜「…も、申し訳ございません」

家永の声「オマエなど、顔も見たくない」

「凜、ショックを受けた顔。」

○（回想）尾道製菓・エントランス

T・「2年前」

佐原凜（28）急ぎ足で歩いていく。

男A「無理に決まってるよ。意地はっちゃつてさ」

男B「うちとプライムが契約できるわけねえつての。バカな女だな。まったく」

○（回想）プライムグループ本社・車止め

凜、家永総一郎（66）の取り巻きに追  
い返される。

家永「尾道製菓だと？顔も見たくない」

家永、相手にせず車に乗り込む。

○（回想）同

雨の日。

風の日。

雪の日。

凜は待っている。

○（回想）同（夕方）

凜、家永に資料を渡すことに成功する。

○（回想）尾道鉛筆・営業部の中（夜）

凜のスマホに電話。電話をとり、歓喜する凜。

○（回想）同・社長室

凜、家永と鳥海の握手する姿を見て、感極まる。

鳥海の声「会長」

○元のカフェ

スマホから鳥海の声。

家永の声「何しにきた」

鳥海の声「会長。申し訳ございません」

○管理室の中

家永、鳥海につかみかかっている。

家永「うちの孫に怪我ひとつでもさせてみる。

ただじゃすまさんからな」

鳥海「も、申し訳ございません」

家永「今すぐ契約を解除してやる」

鳥海「か、会長。そんな」

家永「あんな女を信じた私が愚かだった。全

部、おまえのせいだ。おまえが、あんなの

を私に差し向けたから」

○カフェの中

鳥海の声「…いえ、私も知らなかったんです。

ほんとは。最初は、佐原が勝手に、御社

へ伺っただけです」

凜、ショックを受けた顔。

○（回想）尾道製薬・営業部の中（夜）

凜以外、誰もいない。

パソコン画面には、PowerPoint 資料。

プライムグループの企画書（第21

稿）が表示されている。

凜、内線電話をしている。

鳥海「君のやっていることは正しいことだ」

凜「はい」

鳥海「どんなことがあっても、君をフォロー

するから、思い切ってやりなさい」

凜「ありがとうございます」

鳥海「会社を蘇らせよう。俺たちで」

凜「はい。頑張ります」

鳥海の声「私も、佐原にはたいへん失望しま

した」

○元のカフェ

凜、床に転がっているスマホを茫然と

見る。

凜、シヨックのあまりワンワンと泣きだす。王将を抱きとめていた両腕を、だらんと床にたらしながら。

久良岐、大南を抱きとめて落ち着かせている。めんどくさそうに凜を振り返る。

久良岐「泣くなよ。泣くな。これだから女は」

久良岐、大南の方を見て、

久良岐「ごめんな。ごめん」

大南も少し落ち着きを取り戻し、凜を非難するような視線を送る。

大南「ずっと、うるさかったよ。あの人」

久良岐「女ってのは、そういう生きもんなんだよ」

大南「女のせいで、人生台無しだよ」

久良岐「大丈夫だ。君はやり直せるから。絶対により直せる」

その時、警官たちが雪崩れこんでくる。大南を久良岐ごと抑え込む。

大南「え？え？なんで。なんで」

久良岐、警官たちの隙間から抜け出す。

大南、猟銃を奪われ、地面に組み伏せられる。

警官「お怪我はありませんか？警視正」

久良岐「はい。大丈夫です」

久良岐、冷たい目で大南を見下ろす。

大南、久良岐を見上げて、

大南「どうして？どうして？」

久良岐、何も言わず部屋を出ていく。

大南「嘘つき。嘘つきだ。アンタは。久良

岐、久良岐い」

凜、逮捕のことなどまるで関係ないことのように、わんわんと泣いている。凜にしがみついている王将も泣いている。

○尾道製菓・営業部の中

茜たちが、泣きながら抱き合っている。

○カフェの中

大南とそれを取り押さえていた警官達  
がいなくなる。

凜と王将、そして警官2名だけが残る。

警官A「さあ。行きましょう」

凜と王将、抱き合ったまま動かない。

王将は、警察官たちに背中を向けて、  
腰から下を離して凜にくっついてい

警官B「困ったな」

警官A「さあ。おぼっちゃん。行こう」

警官は王将を凜から引きはがそうとす  
るが、王将、頑なに凜から離れようと  
しない。

家永の声「王将」

家永、泣きながら部屋に入ってくる。

家永、王将のところへまっすぐに行き、  
王将を背中から抱き寄せると、おいお  
いと泣き出す。

家永「よかった。本当によかった」  
遅れて、鳥海が姿を現す。

凜、家永から顔を背けている。

鳥海「佐原」

凜、顔をそむけたまま動かない。

家永「さあ王将。おじいちゃんと一緒に行く  
う」

家永、王将を凜から離そうとする。

家永「王将？王将ちゃん？」

家永、また王将を凜から離そうとする。

王将、頑なに凜から離れようとしなない。

家永「王将。おじいちゃんだぞ。王将」

凜、王将の顔を見る。羞恥心でいっばい。ふと視線を下げると、ズボンが濡れている。

王将の声「俺は、男の中の男だぞ」

凜、王将の腰をつかみ、ぐっと抱き寄せる。

家永「おい貴様。孫を離せ」

鳥海「佐原。何してるんだ佐原」

凜と王将、硬く抱き合う。

家永と鳥海、警察官二人で二人を引き

はがそうとするも、上手くいかない。

○尾道製薬・エントランス

T・「一週間後」

男達が、噂話している。

男A「なんか、あの女、休職中らしいぞ。あの事件のせいかな？」

男B「まさか。あんなもん、あの女からしたら大したことじゃないだろ」

○同・営業部の中

課長席に誰もいない。

茜たち、働いている。

飯倉「課長。戻ってくるんでしょうか？」

茜「なんで？」

飯倉「なんか、このままプライムに転職しちゃうんじゃないかと思って」

○記者会見

家永、泣き笑いしている。

飯倉「あの会長が、課長はお孫さんの命の恩人だって言ってるから」

○尾道製菓・営業部の中

茜「どうかね。わからない」

飯倉「そうですか」

茜「飯倉くんは、戻ってこない方がいいんじゃないの？」

飯倉「そんなことないですよ。課長は、厳しいですけど、正しいことをされてる方です」

茜、飯倉の顔を見る。そして他の社員たちも同じ表情をしていることを見つけ、微笑むと、

茜「そっか」

茜、課長席を見る。

茜の声「凛。早く戻ってこい」

○海月カフェの近くの通り

凛、歩いている。

凛の声「あの事件から一週間、何もする気が

起きなかった。本当にこのまま、自分は終  
わっちゃうんじゃないかと思った。だから、  
無理矢理でも自分を揺さぶりたくて、ここ  
に来た」

凛の見上げる先、海月カフェのビル。

○カフェの入口

カフェ店員「いらっしやいませ」

凛、店内を見る。

凛の声「ここは、自分が、自分でいられなく  
なった場所。なのに……」

凛、店の中に入っていく。

○同・ボックス席

凛の声「不思議と何も感じなかった。なんだ  
か、まるで別の場所のような」

凛、ひとり座り、アクアリウムの中で

浮遊する海月を見ている。

海月はゆったりと浮遊するばかり。

凛の声「私は何のために……」

息を切らす凜の声。

○（回想）尾道製菓・エントランス

凜、全力で走っている。

凜の声「あんなに走りつづけていたのだろうか」

○元のカフェ

カフェ店員「ブレンドのコーヒー、お待ちせ  
しました」

凜「あ、すみません」

凜の目の前に、湯気があがるコーヒー  
カップ。凜、コーヒーに視線を向ける。

凜の声「そうだ。私以外、誰もできないと思  
ってたんだ。自分がいなくちゃ、会社がつ  
ぶれると思ってたんだ」

○尾道製菓・エントランス

社員たちが忙しそうに行きかう。

○同・営業部の中

茜たちが働いている。

○カフェの中

凜、ふっと鼻で嗤う。

凜「そんなはずないじゃない。そんなはず」

凜の拳がわなわなと震えだす。凜、今にも泣き出しそうな顔になる。

その時、店内に入ってきたカップル。

女性客「わー。海月だ。きれいー」

男性客「なんか癒されるねえ」

凜、顔をあげてアクアリウムを見る。

浮遊する海月たち。

ふわり、ふわりと浮遊している。

凜の瞳に映る海月たち。くしゃくしゃになっていた凜の顔が、だんだん柔らかくほどけていく。

凜「もう少し、こうしていよう」

凜、ただ海月を見ている。

タイトル【時には、海月のように揺蕩つてもいいんじゃないか？】